

令和元年度 学校評価報告書

国立市立国立第五小学校

◇ 専科教員を含め全教員で取り組む ■ 全教員で取り組むが成果確認は担任が行う 無印 担任が取り組む

学校 教育 目標	中期経営目 標(カッコの 数字は経営 方針の番 号)	短期経営目標	目標達成のための方策	成果指標	達成状況			分析	改善策	学校評価委員会	
					当初 (5月)	中間 (10 月)	最終 (2月)				
学 び あ っ ず 一 種 か な 学 力 の 向 上 (一 本 年 度 重 点 目 標 ①)	○教員の指 導力向上 (②)	①◇「はい・立っ・です」ができ、 返事をし、「です」「ます」「聞いて ます」「からです」など、発音まで しっかりと行うことができる児童を 育成する。	○「はい・立っ・です」の提示を各学級で提示する。 ○返事から発音の最後まで、話すよう指導する。 ○教師が最後まで児童の発音を聞く。 ○全体の声での返事を見守る教員が必ず ○全校朝会等で呼名された際に関心するよう各学級において指導する。	A 身に付いた児童が、80%以上 B 身に付いた児童が、65%以上～80%未満 C 身に付いた児童の増加が65%未満	C 41.5%	B 66.4%	B 66.6%	・段階的な指導の充実 返事を第一段階として指導を徹底する。低学年段階から語 尾まで話す指導を行う。 ・個別対応の指導 各年度、身に付いていなかった児童への支援を行い、習慣 化を促す。 ・26.6%の児童は5月、10月共に返事や語 尾まで言う習慣が身に付いていない。	・発言する際に返事を語尾まではっきり 言える児童の育成については、学年が 上がるにつれて上がっている。継続的に 指導を重ね、発音のルールを定めて ほしい。また、家庭でも同じ姿勢で子 供たちに話しかけていく必要がある が、家庭でも呼びかけていくことが必 要だろう。		
		②◇ねらいに則したためをもって 主体的に学習に向かう児童を育成す る。	○授業のめあてを板書する。 ○授業の流れの見直しをもたせるための手立てを取り入れる。 ○子供の身近な生活場面に関連するような問題や、児童の知的好奇心に訴える問題を設定する。 ○児童からの疑問などを基に学習課題を作る。	A 音声言語によって発言できている児童が70%以上 自分の考えを伝えられたと感じている児童が70%以上 B 音声言語によって発言できている児童が50～70% 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50～70% C 音声言語によって発言できている児童が50%未満 自分の考えを伝えられたと感じている児童が50%未満	教員評価 A 80.4%	児童の 自己評価 A 89.0%	児童の 自己評価 B 91.6%	・ほとんどの児童が「すずんで学習に取り 組んでいる」と考えており(91.6%)、年度当 初から増加している。 ・全ての項目、①「授業で勉強していること について、自分の考えをもっている」②「考 えたことを伝えたり、発表したりしている」 ③「考えを伝えたりと考える傾向がある。主 体的に取り組んでいる」と考えている児童が 9割を超えているとされている。 ・9割を超えている児童が、友達のことをよく聞 いていると考えている。	・児童の主体性を引き出す授業改善 教師主導の授業から、教師がファシリテーターとして児童 の学びを促進する授業とするよう授業改善を行う。 子供と共にめあてをたて、子供の言葉でめあてを。児童 が考えたくなる・考えを言いたくなる・友達のことを聞き たくなるような、関心に基づいた課題を設定するなどの課 業改善を行う。	・自分の考えをもち、それをはっきりと 伝えることのできる児童の育成につい ては、教員の取組の自己評価と児童意識の 差がまだある。新学習指導要領の趣旨を 踏まえ、より一層考えを伝え合う活動 を取り入れるなど、適切に面付けをして いてほしい。	
		③学年配当の漢字の読み書きと基本 的な計算の仕方を身に付けた児童を 育成する。	○ベーシックドリル等を活用しながら、前学年までに配当されている漢字の読み書き、計算の 練習をさせる。 ○漢字の読み・筆順・熟語の確認・繰り返し書き取り練習を毎日取り入れ継続する。 ○算数科において、習熟度学習を進めながら、基礎的・基本的な計算の仕方を定着させる。	A 国語・算数の平均正答率が、それぞれ85%以上 B 国語・算数の平均正答率が、それぞれ80%以上 C 国語・算数の平均正答率のいずれかが80%未満	国語 A 83.2%	算数 A 79.8%	国語 A 86.1%	・国語の漢字の読みの正答率が9割を超える 非認知正答率が見られた。また、漢字を 書く方でも8割を超える正答率が見られ た。算数では「数量関係」領域で正答率が下 がったものの、課題が見られなかった。「図 形」領域で正答率が上がり、7割を超える正 答率となった。 ・国語・算数の両方で8割を超える正答率 が見られた。	・日常的な基礎的・基本的な学習の指導 各学級にベーシックドリルを組んだ冊子を配布し、宿題等 での活用を促す。 ・体系的な学習と表現する機会の設定 基礎を伴う学習活動の工夫を行い、児童が自分の考えを表 現し、協働的に学び合う授業の展開を工夫する。	・全体的にはいろいろな面で積み重ねの 成果は上がってきていると感じる。 ・教師と子供の自己評価が違っている 結果であり、教師が厳しく見ていること が原因である。	
		④◇自分の考えを伝え合い、広めたり 深めたりする児童を育成する。 (校内研究を核に各教科・領域で取 り組む。)	○基礎的・基本的な指導事項の定着を図る。 ○考えを伝え合う機会を設定する。 ○各教科等において、児童同士の考えを比較検討する機会を設定する。 ○より良い解決方法について議論する授業を計画する。	A 教師設定基準を達成した児童が10%以上の増加 B 教師設定基準を達成した児童が5～10%増加 C 教師設定基準を達成した児童が5%未満の増加	86.2%	児童 の自己評価 85.9%	児童 の自己評価 91.6%	・「考えをもっている」と考えている児童 は9割を超え、主体的に取り組んでいる傾向 がうかがえる。 ・「考えを伝えたり、発表したりしてい る」と考えている児童も年度を通して増え ており、対話を通して学びが促されている と考えられる。 ・学習態度の中で内容について触れて書く ことができる児童が13%増えた。感想の みで終わっている児童は、未だ3割程度い る。	・主体的・対話的で深い学びの推進 校内研究で「主体的に伝え合う児童の育成」に向けて、言 葉を通して伝え合う力を身に付けさせる。また、言葉を通 じて積極的に関わり、自己を表現し、他者の心 と共感するなど、互いの存在について尊重する態度を養 っていく。 ・学習態度の習慣化 ふり返りの視点を与え、学習を振り返る機会を定期的に設 定する。		
助 け あ っ ず 一 種 か な 心 の 育 成 (二)	○自己肯定 感をもち、 他人も大切 にする児童 の育成 (③)	⑤◇自他を大切にすることを児童を育成す る。	○「学校生活アンケート」を実施することで、児童自身に自らの生活の様子を振り返らせ、意 義向上を図る。 ○「学校生活アンケート」を実施し、児童の笑顔や課題を教職員全員で共有する。 ○「学校生活アンケート」の結果をもとに、実態に合った支援・指導を行う。 ○日頃から、保護者と密に連絡を取り合い、児童の成長やつまづきを共有し、児童に自信をも たせるようとする。	A いじめられている児童が0% B いじめられている児童が1～15% C いじめられている児童が15%以上	B 83%	B 88%	A 90%	・全体的に肯定的な回答が増えている。 ・先生方の日常的な指導やアンケートによ る意識付け等によって向上してきたでは ないが。	・アンケートから学年や学年の児童の傾向を教員全体でつ かき、共通認識をもとに指導を行っていく。 ・次年度もアンケートを実施し、学級・専科経営に有効に 活用できるようにしていく。	・国立市のいじめの認知件数について増 加傾向にあるが、潜伏しているものを顕 在化させることで、早期対応と未然防 止につながる。	
		⑥◇いじめや不登校の未然防止に努 め、解決に向けて積極的に取り組 む。	○年3回「いじめ月間(いじめ防止)アンケート」を実施し、聞き取りを丁寧に行い、全職員 で未然防止・早期発見に努める。 ○人権月間に、ビデオ・DVD教材を活用し、自分や他の命を大切にしようとする児童の態度 を育む。 ○5年全員とスクールカウンセラーの面談・給食交流を実施する。また、年度当初に「心のア ンケート」を実施し、児童理解に努めるなど、相談しやすい環境を整える。	A 自己受容評価1点台の児童が0% B 自己受容評価1点台の児童が1～15% C 自己受容評価1点台の児童が15%以上			B	B	・軽微ないじめも適切に見取り、素早い対 応につなげている。 ・引き続き日常的な指導や選別授業等を活用 して未然防止に取り組んでいる。校内の いじめ対策委員会がチームとして対応が たれている。	・いじめや不登校対応について成果がでていると思われる ので、地道に継続していく。 ・次年度から不登校担当教員を置き、家庭と子供の支援 策、SSWとの連携を強化する。	・世の中的には、いじめがないというこ とは考えづらい。子供たち一人ひとりが 軽微ないじめに対応できる姿を身に付 けてほしいと感じている。
		⑦◇すべし先や外部の方に、 適切な(明確な声・一度あいさつし た人には黙礼など)挨拶ができる児童 を育成する。	○各学級で年間として取り組む「あいさつ宣言」を決め、めあてを明確化して進んであいさつ をする児童の育成に努める。 ○毎年のあいさつ当番活動を発着にし、全校児童の手本となるように育む。 ○相手に関心する声で、はっきりとした言葉であいさつをしたり、黙礼したり、態にふさわしい あいさつができるよう育む。	A 95%の児童が身についている。 B 90%の児童が身についている。 C 身についている児童が90%未満	C 79%	C 80%	C 82%	・あいさつが、「あいさつ」の意識付け ができてきた。	・代表委員会の活動、全校朝会の時間などを活用し、引き 続きあいさつの推進を図っていくとともに、学校帰り、学 年寄り、保護者など地域保護者に呼びかけていく。	・学校見守りボランティアとして、子 どもの顔や様子をよく見て、小さな変化 を見ている。	
		⑧基礎的な 体力の向上 (④)	○基礎的な体力の向上に努める児童 を育成する。	○年間7回、木曜日の中休みに「ワークアウト」を設定し、クラスごとに、体力向上を図るための 運動に、順次取り組ませる。 ○体育委員による「ワークアウト」を学期に1回以上開催し、体力向上を図った運動を、 ゲーム感覚で楽しめながら行う。 ○各クラスで1年間を通して行える体育的活動を「一学年一実証」として、設定する。 ○持久力を高めるために、「くじこステップス」をワークアウトの前に取り入れる。 ○保健だよりにて、早期発見・早期対応に努めるなど、大切さを伝え、保護者への意識啓発を行う。 ○中休み、昼休みのどちらかは外遊びをさせるようにする。 ○5月、1月のなれとびチャンピオンで、大縄、短縄をする。	A 休み時間に外遊びをする児童が85%以上 B 休み時間に外遊びをする児童80%以上 C 休み時間に外遊びをする児童80%未満	A 89.7%	A 87.4%	A 92.6%	・体育週りと重なったが、すべての学年で 8割の児童が、外遊びをできた。 ・低、中学年は前回より達成率が上が った。高学年は前回よりほとんど変わらず、 9割近い達成率だった。 ・中休み・昼休みの外遊びを選択でき ているのがよかった。	・引き続き先生方の声かけや一緒に遊ぶ、クラス遊び等の 取り組みを行っている。 ・全校朝会で外遊びを促す語をする。	・五小の体力テストの結果がよくないとい われている。パワーアップタイムなどの成果 が表れていることとされている。
鍛 え 合 う 子 ど ろ の 心 身 の 健 康 な 育 成 (三)	○心身の健 康づくりに 努力する児童 の育成 (⑤)	⑨■保健指導(手洗い・うがい・換 気)を充実させ、健康に気をつける 児童を育成する。	○休み時間後や給食前、手洗いうがいの声かけをする。 ○保健だよりや保健委員会の集会で、感染症予防を呼びかける。 ○掃除や休み時間等で窓やドアを開け、換気をする。	A 手洗い、うがいをしている児童85%以上 B 手洗い、うがいをしている児童80%以上 C 手洗い、うがいをしている児童80%未満	B 84.7%	C 77.8%	B 81.4%	・インフルエンザが新型コロナウイルスのニュース 等、又は教職員の声かけで手洗いうがいの 意識が高まったと考えられる。どの学年も 前回よりは達成率が上がっているものの、 当初より下がったため、今後も継続した指 導が必要である。	・児童と共に教員側の意識を高めて、声かけを積極的 にする。 ・全校朝会、保健だよりや保健委員会の集会で、感染症予 防の呼びかけをする。 ・給食開始時に「あわあわ手洗いの歌」を流し、意識付け る。	・毎年インフルエンザの流行がある。手 洗い、うがいの徹底を今後も継続してほ しい。	